Fate/Brave

NeoNuc2001

【注意事項】

このＰＤＦファイルは「ハーメルン」で掲載中の作品を自動的にＰＤＦ化したものです。

小説の作者、「ハーメルン」の運営者に無断でＰＤＦファイル及び作品を引用の範囲を超える形で転載・改変・再配布・販売することを禁じます。

【あらすじ】

Ｒ―１５とか残酷な描写とか、そんなタグがついてますが、ゆゆゆやＦａｔｅを最後まで見たなら問題はないと思います（実際にそうなるかは神のみぞ知る）。

Ｆａｔｅとゆゆゆを掛け合わせた物語。設定と座を型月から、舞台をゆゆゆから持ってきてバーテックスとなぐり合います。

考察に関してはある程度行ったのでそこらへんも考えて読んでいただければ幸いです。

タグでわかると思いますが、ほかにもいろんなクロスオーバーしてます。

最後に

「さぁ、なぐり合え。馬鹿ども」

目　次

マテリアル
マテリアル　セイバー ―― 1
本編
00　開幕前／種子 ―― 4
01　プロローグ　その一／芽出 ―― 6
02　プロローグ　その二／双葉 ―― 9
03　プロローグ　その三／開花 ―― 14

マテリアル
マテリアル　セイバー

クラス：セイバー
真名：ネロ・クラウディウス
ステータス
筋力：D
耐久：D
俊敏：A
魔力：B
幸運：A
宝具：―
スキル
騎乗：B
乗り物を乗りこなす能力。Bランクで魔獣・聖獣ランク以外を乗りこなすことが出来る。
本来はライダーの適正があるのだが、最優のセイバーこそふさわしいと思った召喚者がクラスの変更を促した。
その召喚者曰く「…　それほど難しくなかった」とのこと。
対魔力：B
クラススキルの一つ。魔術の類の効果を軽減・無効化する効果を持つ。
セイバーのクラスでありながら適正がないために低いランクになっている…　はずだが、上記の召喚者の助力によりランクが上昇している。
エネルギー系の攻撃に対して大幅な耐性を得られる。
頭痛持ち：B
出自による呪いに起因する、慢性的な頭痛持ち。精神系スキルの成功率を著しく低下させる。
生前の出自から受け継いだ呪い。せっかくの芸術の才能が、このス

キルのため十全には発揮できなくなってしまっている。
皇帝特権：ＥＸ
本来持ち得ないスキルを、本人が主張することで短期間だけ獲得できるというもの。該当するのは騎乗、剣術、芸術、カリスマ、軍略、と多岐に渡る。
Ａランク以上のため、肉体面での負荷（神性など）すら獲得が可能。
三度、落陽を迎えても：Ａ
インウィクトゥス・スピリートゥス。最期の逸話から生まれた戦闘続行系のスキル。
自決したネロはその三日後、ローマ兵士に発見された。最期を憐れに思った兵士が布をかけた時に一度だけ目を開け、ローマ兵士を労ったという。
常時発動スキルで、瀕死の攻撃を受けても一度だけ復活できるスキル。
神性（偽）：Ｂ
神霊適正をあらわすスキル。本来ネロが持ちえていないスキルだが、何かしらの理由で獲得した模様。皇帝特権でランクを上昇させることが可能。
バーテックスに対する攻撃がある程度通るようになる。
宝具
招き蕩う黄金劇場
ランク：―
種別：対陣宝具
レンジ：３０、６０、９０
最大補足：１００人、５００人、１０００人
黄金宮「ドムス・アウレア」を世界に投影する大魔術の一種。あくまでも投影なので固有結界と違い、樹海を防御することはできない。しかし、その分燃費が良い。
この劇場に閉じ込められた招かれたものは皇帝ネロ・クラウディウスが決めたルールに従わなければいけない。絶対皇帝圏。なおその性能の限界等はいまだ良くわかっていない。

詳細

ローマ帝国の第五代皇帝であり生前、死後ともに暴君の烙印を押された英霊。その性質から反英霊にちかいものだとされる。しかしその性格は明るく軽快で、反英霊とは思えない。

なお死後に改めて暴君と呼ばれた原因として■■■■があるが、■■■が■■■■■を含む可能性があるため■■■■■を■■とするローマの英霊でありながらも特例として召喚された。

本編

００　開幕前／種子

神樹様は我々に神託は下すものの、こちらの声は届かない。
神樹様は我々を守護してくれるが、外へは向かわない。
神樹様は我々の生活を整調するが、こちらは何もできない。
だからこそ、超常の力を得るには強引な方法で行かなければいけない。
しかし、それを間違いだと主張する者がいた。
それは無下にできるほどの小さな声ではなかった。
ゆえにそれは考える。強大な敵を予想した新たな実装を前に神官が、大赦が成せること。
そこで、魔術師は迷宮をさまよう。
獲得しよう。精霊を完全に使役し、その代償として負の感情を背負う昔のシステムとは違う新たな「セイレイ」を。
強大な力を得ながら、代償を払わない方法にたどり着くために。
そして行き着く。根源を失った、否根源が失われた彼にしてみれば、新たな発見、新たな希望。
それは、力を得ないことだと。
己が力を持たず、されど強大な力を保持する。
それは、使い魔を扱うことだと。
つまりは英霊。人智を超えた人智を利用すること。
ただ、それには第三魔法が必須だった。されど彼にとっては不可能ではなかった。
別の未来を選択することで、第三魔法の使い手を生み出す。
人理が半ば失われた今だからこそできる裏ワザ（チート）。
だが、そこまでだった。彼にはこれ以上の力の行使はできなくなった。
魔力が足りないわけでもない。魔術回路が少ないわけでもない。
ただ、できなくなったのだ。彼の力、ある種の権能では相性が悪い。

彼は、人々の平和な生活のために〝人間〟の可能性を書き換える手をとったのだから。
ゆえにバーテックスの戦闘に関しては、手出しができない状態になった。
月を打ち返したあの技はとうに使うことができないのだから。
作業はすすむ。そして、時は立たずに小聖杯が出来上がる。
試験運用で一騎の英霊を召喚する。
この小聖杯における事柄は後に大きな役割をはたす。
そして、時は進む。大聖杯を神樹様と礼装につなげる。
魔力は大聖杯に蓄積され、五騎の伝説の体現者（サーヴァント）が新たにここに集う。
手を取るは、五人の勇者（マスター）
争う相手は人類の、天敵（バーテックス）。得るは万能の願望器（根源）。
純情と薔薇のセイバー
征服と型破りのアーチャー
蒼鋼と力学のライダー
無と有のキャスター
時間と友情のアサシン
座から呼ばれし、英霊たちは何を咲かすのか。何を魅せるのか。
裏では、錆びれた魔法が働く。身を削り行うその行為。果たして善に転がるか、悪に転じるか。
一人の観測者を含めて、世界は大きく動き出す
一人の王もその結末を待ちながら。

01　プロローグ　その一／芽出

今日は心が清められるかのように快晴の天気です。それこそ太陽光が全てを包み込もうと、全てを輝かそうとするかの如く。しかしその光すら霞む程の、いや光が霞むのはおかしいけど確かに霞んでいました、顔が私の隣で喜びと温かさを振りまいていました。

そう今、私が話したことは友奈ちゃんのことです。友奈ちゃんは少しおっちょこちょいで私より気が抜けているかもしれないけど、友奈ちゃんはとても、とても可愛くてそして優しくて、笑顔を武器に周りを笑顔にするムードメーカーです。

私はそんな友奈ちゃんが好き。彼女を見ると日常が、この国の平穏が保たれていると感じるから。そんな気がする。

「さぁ東郷さん、学校も終わったから勇者部にレッツゴー!!!」

「あまり慌てちゃダメよ。ゆっくり行きましょう。」

「ごめんね、久しぶりの勇者部で興奮しちゃた」

えへへと笑いながら私の車椅子を押していく友奈ちゃんは可愛いと思います。そう、三日前から友奈ちゃんは風邪で寝込んでしまっていました。風邪をひいたことがない友奈ちゃんが風邪をひいて、私は慌ててしまい、思わず泣いてしまったけど今は無事そのものです。きっと神樹さまがなにかをしてくださったにちがいないと私は内心思っています。

「風邪は治っても、まだ病み上がりなのだから気を付けないと駄目よ。」

「勇者部五ヶ条ひと～つ！為せば大抵なんとかなる！」

「無理しちゃダメて言ったばっかでしょ。もう友奈ちゃんたら。」

私たちはこんなたわいもない日常的な会話をしながら勇者部に到着しました。ドアを開ければそこには二人の勇者部員がすでに駐在してました。

一人は期待の新人、樹ちゃん。犬吠埼家の妹で勇者部の調停役。樹ちゃんは占いが得意です。その的中率は約六割五分。さらに小道具も足すと八割五分ほどになる高い占い力を持っています。他にも

色々なことがこなせる万能な一年生です。
　もう一人の勇者部員は部長の風先輩。犬吠埼家の姉にして勇者部の女子力担当。風先輩はそのカリスマで勇者部を立ち上げ、引っ張ってきた尊敬する先輩。風先輩の口癖は「うどんは女子力を上げるのよ」です。その言葉通りに先輩はうどんをよく食べ、樹ちゃん曰く財布は火の海の中だそうです。なお、女子力の能力数値は誰にもわからないようです。
　そして原作とは違い地の文を担当するは私、東郷美森です。
「だめだよ、東郷さん。ちゃんと自分のことも説明しないと。」
「もう友奈ちゃん、地の文に関わっちゃダメよ。」
　は～いと言いながら反省する友奈ちゃんを見て思わず気が緩んでしまうがそれでもこれに関しては反省を促さないとだめだ。だが、確かに友奈ちゃんの言う通りだ。私、東郷美森は4月8日生まれの中学二年生。好きなことは歴史とうどんで嫌いなことは日常を壊すもので大切なものは友達だ。
「ほーら、そこで何の話してるのよ？私も混ぜなさいよ。」
「何でもないですよ。ところで先輩、ミーティングは始めないんですか？」
「そ、そうね。それじゃ、ミーティングを始めるわよ。」
　なぜか若干顔をひきつらせながらも風先輩は今日も勇者部を引っ張っていくのだった。そして今日も勇者部は勇んで色々な人を助けにいくのだった。
「ところでさ、昔の偉人や英雄に会えるなら誰に会いたい？」
　場所が変わってかめやで風先輩は唐突にそのような質問をしました。そのような質問をされて最初に答えたのは
「そうですね、やはり織田信長でしょうか。明智光秀に裏切られた時の気持ちとか、天下統一を決行する決意をした経緯とかを聞きたいですし、後は東郷平八郎でしょうか。バルチック艦隊を破る際になぜＴ字型の戦法をとったのかを聞きたいですし、他にも・・・」
　私でした。
「そこ、ストップ！聞いた私が悪かったから止まって、いや止まってく

ださい！」
　風先輩は最終的に敬語を使ってまで私の願望の発露を止めようとしたがおよそ１０分間、それは止まることはなかった。
「ところで、どうして東郷先輩は歴史について詳しいのでしょうか。」
「歴史とは私たち人間が歩いてきた証。ならばその道筋を知り、理解することで先達の偉大さに敬意を表し、獲得した教訓や技能を受け継ぎ、今後の道を定めるための判断材料にするために歴史を理解する必要があるのよ。だから私は歴史について詳しいのよ。」
「な、なるほど・・・」
「樹、東郷の言っていることを理解しちゃダメよ。」
「やめてください、風先輩。これは護国思想を広めるための第一歩なんですよ。」
「本音がだだ漏れよ、東郷。」
「先輩、天ぷらをどうぞ。」
「気が利くわね、東郷。なんなら勇者部の力で護国思想を広めていこうかしら。」
「お姉ちゃん、簡単に釣られ過ぎ」
「うっ・・・」
　風先輩と樹ちゃんは苦笑いしながらも、みんなでうどんを食べていく。ちなみに風先輩は7杯まで食べて帰っていった。
「今日も楽しかったね、東郷さん。」
「そうね、今日もとても楽しかったわ。」
「それじゃ、東郷さんまた明日。」
「また明日。」
　障害者支援の車から降りて、友奈ちゃんとした会話。今日の日常を称賛し、明日の日常を歓迎する会話。今日はここで別れる。明日の日常を願って。

０２　プロローグ　その二／双葉

時間を先に延ばして、学校で三時間目の授業で友奈ちゃんは睡魔と格闘していました。時にほっぺを伸ばしながら、時に実際に格闘しているかのような動きをしながら、時に敗北しかけた友奈ちゃんを私が起こして。

「ありがとう、東郷さん。」

「そこで何を喋っているんだね？」

「いいえ、何でもないです。いや、何でもなくはないんですけど。」

どうやら目は良くないが途轍もなく耳がいいらしい老齢の教師は友奈ちゃんの声に気づいて注意をしたようだ。これで友奈ちゃんの目が醒めるなら良いことなので見守ろうとしたが、

唐突に謎の音が響いた。

思わず緊張してしまうような、まさしく日常を終わらせ、非日常の始まりを告げる警報を思わせた。

そしてそれは大方間違いではなかった。

「結城、鞄の携帯が鳴っているぞ。むっ？東郷、お前もか？」

「えっ！うそ？おっかしい～な？」

私も、えっ、と思った。電源は授業前に消した筈なのに。まさかと思いながらも真偽を確かめるために私は鞄を開き、

そこには単語が書かれていた。

樹海化警報と携帯に、派手な音を出しながらくっきりと写し出されていた。

「うーん？これ、これどうやって止めるんだろう？」

友奈ちゃんは止める方法を探しているらしく、これは携帯の機能の一つだと思っているようだ。しかし私は困惑していた。このような機能は全く知らない。文字と音の意味も全く知らない。改造する際にこのような機能は見たこともない。これは一体どういうことなのか。

「あっ、先生、鳴りやみました…　あれ？」

携帯から突如、音と文字が消えた。しかしそこには新たに見たこと

のない画面が表示されていた。だが、それを気にするよりももっと大きな問題を抱えていた。
「あれ？皆どうしちゃたの？なんで東郷さん以外は動かないの？」
そう停止していたのだ、何もかもが。落ちている鉛筆も、消している消しゴムも、書いている途中のチョークも。ただ、私と友奈ちゃんの身の回りの物以外は。それはあまりにも不自然で、一つの場面を切り取ったようだった。そこではまさしく私と友奈ちゃんは読者か観客だろう。
「友奈ちゃん・・・」
私は思わず友奈ちゃんに助けを求めてしまう。
「大丈夫、私がついてるから。」
友奈ちゃんは私が落ち着くように不完全ながらも笑顔を作る。これで私は安心する。友奈ちゃんの笑顔にはそれだけの力がある。そして落ち着いた私はこの状況を知るために考え始めた。
「とりあえず、外に出て状況を確認しようね。」
「うん！そうだね。」
そう言いながら友奈ちゃんは最初に教室のドアを開けて、私の車椅子を押して外の廊下に出ようとする。そしてそこも静寂に包まれていた。
授業中であることから静寂は当然の様にも思えるが実際は違う。気づいた理由は動いた瞬間の違和感。廊下に出ることでそれは強い確信に変わった。
車椅子のタイヤを回すときに発生する摩擦音は聞こえる、だが友奈ちゃんの足音やドアを開ける際の音がまったく聞こえなかったのだ。
「・・・」
外ではこの異常な状況に関わらず無風であったので正確に変化を読み取ることはできない。しかし、だいだいわかってしまった。この世界においては私たち二人以外は誰も動いていないのだと。
突如として亀裂がはいる。外の壁の上で一瞬亀裂が入ったのだ。その亀裂はなくなったと思えば、そこから真っ白な光が浸食し始めた。奥行きが消えたかのように錯覚するほどの光、いやそれ以外のナ

ニカだろう。
そしてここまで客観的に考えて気づく、ナニカが学校に向かっている事に。
そう、つまりここにいる私たちを飲み込もうと
「東郷さん！」
「友奈ちゃん！」
そう考えているうちに私たちは光に飲まれていた。

次の瞬間に目を開けたら、そう、私たちは、一つの光景を目にしていた。
大小様々な樹木に囲まれた世界を。
それは色鮮やかで虹を連想させるものだった。
赤、青、藍、水、虹、空、灰色だった。
樹木でありながらそのような様々な色を持ちとても幻想的で、美しくて、とても恐怖を感じる世界。既視と違和が重なり合う世界。そこに立つのは私と日常の象徴である友奈ちゃん。しかし、友奈ちゃんはこの世界では異物であった。そう、つまり私たちは非日常に引き込まれたのだ。
「東郷さん、ここ、どこかな・・・」
「・・・」
友奈ちゃんは私に質問を投げかけたが、こちらを見て少し残念そうになった。私が答えられないことでさらに不安になってしまったのかもしれない。これは私の落ち度だ。せめて、周囲の状況を把握して予想なり、なんなりを答えるべきだ。
そのように考えていたところ、後ろで草木がこすりあう音がした。
「あっ、よかったわ。なんとか見つけたわ。」
「ふ、風先輩!!」
「ふう・・・ スマホを手放してたら打つ手はなかったわ。」
どうやら動けるのは私たちだけではなかったようだ。それは不幸

中の幸いとも言え、まさしく神樹さまの導きなのだろう。しかし、もう一つの気になる言葉があった。
「スマホ・・・。風先輩、なにか事情を知っているんですか。ここはどこですか。」
「・・・今から説明するわ。」
友奈ちゃんが私に投げかけた質問を風先輩に渡した。友奈ちゃんの疑問に答えるために。

「・・・というわけなのよ。」
という風に風先輩は現在の状況を説明した。ここが樹海という神樹によって作られた結界であり、さっき見たとおりに時間は止まっているので心配する必要はないと。神樹の行ったことだから問題はないだろう。しかしこのようなことをして一体なにが起きるというのか。
「お姉ちゃん、あそこ・・・」
「来たわね、足の遅いやつで助かった。」
樹ちゃんが指差した先には〝異物〟が存在した。見た目は丸みのある顔のような部品を持ち、何かの生物のように見えるが、あれは明らかに生き物ではない。色が、形が、質感があれが非生物だと証明している。しかし、生物のように動いても見せる。あれは、一体、なんなのか。
「あれはバーテックス。神樹様を、人類を、壊す敵よ。私たちの役目はあの敵を倒すこと。そうしないと世界が滅んでしまう。」
「そんな。あんなのと戦うなんて無理ですよ!」
私は思わず叫んでしまう。あんな異形と戦うというのか、私たちみたいな一般人が。そんなの・・・無理に決まってる。そのうえ、私はこんな、足も動かない体で、戦えるわけがない。あんな、モノ、と戦うと思うと前進が恐怖で震えてしまう。
「大丈夫、方法はあるわ。このスマホの機能を・・・」

爆音が響いた。私が最後に見たのは敵が火の玉をこちらに向けて打ったのと友奈ちゃんだった。

０３　ブロローグ　その三／開花

「はぁっ！」
　あの異物、バーテックスがなにかを放ったのは見えた。赤い何かも見えた。だがそれが、まさか必死の一撃だとは思わなかった。
　それが迎撃されるまでは
　そこに立っていたのは赤い人。
　最初、私はこのようにイメージが開いた。
　次に感じたのは純情の花、情熱の花。
　そして私はそのようにイメージを結んだ。
　周囲には爆風が広がる。そう、あれは爆撃だったのだ。赤い人が防いでいなければあの炎は私たちに寸分狂わず当たり、爆発が起き、死んでいただろう。
　ここでこみ上げるのは、動揺、安堵、感動からの不安、そして僅かな不信。
「余が来たからにはもう安心だぞ。で、どうする、わが奏者候補よ。」
「弱ったわね、もう敵の射程範囲内だなんて。とりあえず、こっちの説明が終わるまでがんばって耐えて。」
「なんという無茶ぶり！そなたが先に説明しないのが悪いのだろう！」
　言動からして悪い人ではないかもしれないが、その軽快さは逆に違和感を覚える物だった。何故あの人はこんな非日常な空間で普通に振る舞っていられるのだろうか。
「どこまで説明してたっけ？そう、このスマホの機能を使って神樹様の、勇者になることができるのよ！」
「余は無視か、無視されるのか！なんと言う横暴！余が生前にしたことなど豆のように小さく見えるぞ！」
「お姉ちゃん、だんだん漫才みたいになってるよ・・・」
　樹ちゃんの適切なつっこみにより風先輩は一瞬むぅ、となったが
「いいのよ、とにかく早く説明しないといけないのよ。えっと、勇者になればあの敵と戦うことができる力が手に入るわ！後は、えっと、そ

うそして、そこで騒いでるあの赤い人は、英霊（サーヴァント）と呼ばれる存在よ。」
「そうだ、余こそがローマ皇帝、ネロ、というか今度はバーテックスが邪魔してくるのか！」
今度は白い爆弾が複数出てきたようだ。それがこちらに向かってくるのだが、その動きが
あまりに異常だった。
なぜなら、それはあまりにも自由にこちらに向かってきたのだ。速さや向きにも多大な変化があった。私にはどこに来るのか予測をする事はできなかった。
しかし赤い人はそれを難なく破壊して見せた。
「改めて紹介しよう。余こそが、余こそがあの偉大な神聖ローマ帝国皇帝、ネロ・クラウディウスだ。クラスは見た通りのセイバーだ！よろしく頼むぞ！それで誰と契約するのだ？」
「そうね。なら・・・」
「そんなのできるわけないじゃないですか！あんなのと戦うなんて私には無理・・・」
私は否定した。戦うなんて出来るわけがない。あんな絶対に敵わないアレと戦うなんて。こんな体で？
「友奈、東郷と一緒に逃げて。そしてセイバー、あんたは友奈と東郷を守って。」
「なるほど、いつ狙撃されるかわからんしな。では、余は守りに専念するとしよう。」
「わ、わかりました。」
「樹。あんたも一緒に逃げなさい。」
「駄目だよ！一緒に行くよ。どこまでも。」
樹ちゃんと風先輩は何かの約束をしたのだろうか、しかし私には関係のない話だった。
状況は混乱していた。様々な事が様々な変化を起こしていた。そのような中で次に何が起きるのか分かる術もなく、ただ敵が近づいてることだけは理解していた。

気づいたら風先輩と樹ちゃんはここにはいなかった。きっと敵と戦っているのだろう。
それに対して私は恐怖に駈られて戦うことができなかった。
「大丈夫だよ、東郷さん。私と、セイバーさんがついてる。」
「ありがとう・・・ 友奈ちゃん・・・」
友奈ちゃんは私を励ましてくれる。だけど私は恐怖から逃げられない。
私は何してるのだろう。
後輩が頑張っているのに
先輩が先導しているのに
助っ人が来てくれたのに
世界が壊れてしまうのに
友奈ちゃんが私を元気づけているのに
私はなにもできなかった。
風先輩に応援の言葉をかけることはできなかった。
樹ちゃんに良いアドバイスをしてあげられなかった。
今も赤い人に感謝の言葉をあげられていない。
世界を守るなんて、私にはできっこない。
だけど友奈ちゃんを守っていきたい。
「風先輩！樹ちゃん！」
いきなり友奈ちゃんが叫んだ。風先輩と樹ちゃんに何かがあったのだろうか。そう思い風先輩と樹ちゃんがいる戦場をふと見てみたら、
「こっち見てる・・・」
私たちを見ていたのだ。こちらをしっかり。アレが持てる全ての感情をもって殺意を向けながら。あるいは無感情で冷静に殲滅する目標を定めているかのようだった。
「くっ、二人ともやられてしまったか。このままだと樹海が傷つけら

れてしまうし、かと言って余が先陣を切る訳にはいかんしな・・・」
　このままだとアレがさっきの爆撃をしてくる。近づいてくればその頻度と火力は増していってしまう。遠い今なら。
「友奈ちゃん、一緒に逃げよう・・・」
「嫌だ、友達は見捨てない。」
　友奈ちゃんはそこで何かに気づいたかのように携帯のアプリを見て、まさか、友奈ちゃん？
「そうだ。友達を見捨てるようなやつは勇者じゃない！」
「待て！余は・・・」
　爆撃が来た。思案中だったのか赤い人はその攻撃に対応することはできなかった・・・　できなかったが・・・
「友奈ちゃん！」
　友奈ちゃんは勇者に変身し爆弾をやり過ごしてみせたのだ。そしてそのまま友奈ちゃんは敵のいる場所に跳躍してみせた。

　その後アレは倒されたが、私は結局なにもできなかった。